

お薬のしおり

低用量ピルについて No.54 (H18.3)

東京医科大学病院 薬剤部

平成11年9月より、日本でも低用量ピルが解禁となりましたが、普及率はまだまだ低く、わずか2%弱に過ぎません。ちなみに欧米など先進国での普及率は高く、ドイツでは生殖可能年齢(15~49歳)にある女性の58.6%、同じくオランダ49.0%、ベルギー46.7%となっています。

〔低用量ピルとは?〕

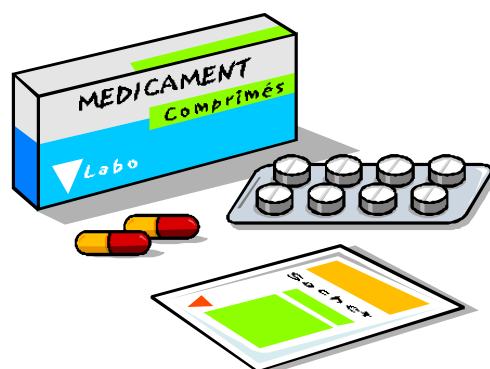
卵胞ホルモンと黄体ホルモンの二つの女性ホルモンを化学的に合成したものです。これを服用することで、脳の視床下部 - 下垂体に作用して卵巣から卵胞ホルモンや黄体ホルモンが十分に分泌されているものと勘違いさせます。このことから、卵胞刺激ホルモン(FSH)や黄体化ホルモン(LH)の分泌が抑制され、卵胞が成熟せず、排卵を起こさなくするのです。また黄体ホルモンの作用には、子宮頸管粘液を変化させ、子宮頸管の入り口が蓋をされたような状態になり、精子の子宮への侵入を妨げるなどの働きもあります。さらに子宮内膜の成熟を抑え、受精卵が着床しにくくする、つまり妊娠しているのと同じようなホルモン状態を体内に作り出しているのです。

〔低用量ピルの種類〕

現在発売されている低用量ピルには、一周期におけるホルモン量の変化のつけ方から、一相性、二相性、三相性の三種類があります。

一相性ピルは服用中のホルモン量は常に一定としたもの、二相性ピルは排卵を境にして卵胞期と黄体期でホルモン量に変化をつけたもの、三相性ピルは、二相性ピルのホルモン量変化に加えて排卵期のホルモン量を考慮して変化をつけたものです。

一相性では不正出血は少ないものの悪心・嘔吐などの副作用が出現しやすく、ま



た三相性では副作用症状は少ないが不正出血が起こりやすく、また飲み忘れに対する対処が面倒である、などの特徴があります。(二相性はその中間的性質)

〔低用量ピルの副作用〕

低用量ピルは中・高用量に比べ、副作用が少なくなっていますが、全くないわけではありません。ピルの服用を開始してしばらくの間、悪心・嘔吐・頭痛・不正出血などのトラブルが発現することがあります。しかし、それらは2～3周期でほぼ減少します。その他、眠気、浮腫、体重増加、にきびの出現が少数みられます。以前のホルモン量の多いピルでは、血栓症や心筋梗塞などの重大な副作用が指摘されていましたが、低用量ピルではこのような副作用が大幅に減少しました。その他、わずかながら、乳がんにかかる可能性が高くなるという報告もあります。

〔避妊効果以外のメリット〕

副作用のみが取り上げられがちなピルですが、ピルは避妊効果が高いたけでなく、女性の体によい作用があることも知られています。それは月経不順の改善、出血量の減少、月経痛・月経前症候群の緩和、子宮内膜症・子宮体がん・卵巣がんの予防、にきびや多毛症の改善などです。これらの婦人科疾患に対して、これまで中用量ピルが用いられてきましたが、よりホルモン量の少ない低用量ピルの出現によって、より副作用の少ない効果的な治療が行えるようになりました。

このように、ピルは医師の指導のもとで正しく服用すれば、恐ろしい薬ではなく女性の味方となる薬なのです。とは言え、低用量ピルは医師の処方せんがなければ薬局で購入できません。処方前の問診や検査を十分に受け、注意事項などを知ってから服用して下さい。服用後も定期的な検査が必要なこと、副作用のことなどできる限り説明を受け、納得した上で処方を受けることが大切です。

また、健康保険が適用されないため全額自己負担となります。低用量ピルの1カ月分の価格は2500円～3000円ですが、その他に診察代が追加で必要となります。金額は医療機関によって異なりますので、詳しくは診療施設でご相談下さい。

